

カンキツの計画的密植栽培の実証試験成績

(第4報) 若木結果初期の結実法について

長田一美・田中武人・和田洋之・中野孝美

(福岡県農業改良課)

OSADA, K., TANAKA, T., WADA, H., and NAKANO, T.

Trials on High Planting Density on Quick Increasing of Yield in Citrus Orchard

(IV) On the Fructification Methods of Young Tree Age.

1967~1968年にわたり普通温州ミカンの計画的密植栽培における技術体系を確立するため、結実開始当年、および増収樹冠拡大初期の結実法と樹冠拡大との関係を調査したので報告する。

I. 試験方法

供試樹は結果開始年の春まで慣行せん定を行った林温州(試験当年4年生)、10a当り133本植を供試した。区別は密植せん定区と慣行せん定区に大別

し、結実法は全面摘果(30/1果)区、樹冠上部を摘果区、延長枝摘果区とした。その他に全面摘果した1次間伐区、2次間伐区についても調査を行った。

II. 試験結果および考察

1. 1樹当り平均着葉数の増加は、試験当年および翌春(5月)までの結果では、 $\frac{1}{2}$ 摘果区>延長枝摘果区>30葉摘果区の順にあった。

第1表 着葉数の推移調査(1樹平均数)

樹令 時期別		密植せん定区			慣行せん定区		
		30葉区	$\frac{1}{2}$ 区	延長枝区	30葉区	$\frac{1}{2}$ 区	延長枝区
4年生	A. 摘果期(7月)	2,609	2,491	2,574	2,785	1,762	2,742
	B. せん定期(2月)	3,164	3,486	3,384	3,987	2,707	3,532
5年生	C. 春枝停止期(5月)	4,827	4,987	3,888	3,256	3,499	4,965
葉数増加	4年生 B/A	121	139	131	114	153	128
指数(%)	5年生 C/A	180	204	151	116	198	181

2. 摘果処理後の夏秋枝発生による樹冠拡大については $\frac{1}{2}$ 区が最も大きい、次いで延長枝区となった、しかし、 $\frac{1}{2}$ 区ではその後の発育がや、徒長的で早生温州の場合とかなりおもむきを異にした。

又、1立方メートル当りの夏秋枝発生密度においても $\frac{1}{2}$ 区がもっとも多い。

第3表 樹冠占有率(%)

項目		密植せん定区			慣行せん定区		
		30葉区	$\frac{1}{2}$ 区	延長枝区	30葉区	$\frac{1}{2}$ 区	延長枝区
42年度	摘果期 A	13.8	11.6	11.9	11.3	11.0	14.2
	せん定期 B	23.7	34.3	29.7	29.3	31.3	31.6
43年度	春枝停止期 C	28.0	39.0	33.0	27.0	32.0	34.0
増加指数 C/A		202.8	336.2	277.3	238.8	290.9	239.4

第2表 結実法と夏秋枝発生密度(1樹平均)

項目		密植せん定区			慣行せん定区		
		30葉区	$\frac{1}{2}$ 区	延長枝区	30葉区	$\frac{1}{2}$ 区	延長枝区
夏秋枝全葉数 A		555	995	810	402	945	790
発生枝数 B		26.3	26.0	37.0	30.0	37.0	22.0
	A/B	21.1	38.3	21.9	13.4	25.5	35.9
発生密度本/m ²		12.1	14.7	20.1	20.0	22.2	10.4

3. 樹容積、樹冠占有率の年次的拡大に順応して、品質、収量、L~M果率が上昇した。

又、占有率の伸びは $\frac{1}{2}$ 区がトップで、延長枝区、30葉区の順に増大した。

まとめ：以上の結果より、結果開始当年から増収樹冠拡大初期における結実法(摘果法)はせん定がふつうの場合には、夏秋枝の発生を促して樹冠拡大、葉数増加、結果量を増加良好にする樹冠上部を摘果法や延長枝摘果法が適当であった。しかし、樹令(7~8年)頃になると枝葉の交さくがいたずらに早くなるので、必ずしも適確な処理とは言えない点もある。したがって樹令とは関係なく占有率45~50%頃までは強制的に樹冠拡大をはかる摘果法を採用し、以降は樹冠全面に結実させる摘果法が实际的である。